

11/17 Sun.

第116回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No.116 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6

KEN-ICHIRO KOBAYASHI

伊藤悠貴 -p.8

YUKI ITO

長原幸太

KOTA NAGAHARA

チェロ協奏曲 口短調 作品104 [約40分] -p.10

Cello Concerto in B minor, op. 104

I. Allegro

II. Adagio ma non troppo

III. Allegro moderato

交響曲 第9番 木短調 作品95 〈新世界から〉

[約40分] -p.11

Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

I. Adagio - Allegro molto

II. Largo

III. Scherzo : Molto vivace

IV. Allegro con fuoco

11/18 Mon.

第23回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19時30分開演 (19時00分から解説)
YOMIKYO ENSEMBLE SERIES, No.23 / Yomiuri Otemachi Hall 19:30 (Pre-concert talk from 19:00)

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン》

中川賢一 (ゲスト)、小坂圭太 (ゲスト)

KEN'ICHI NAKAGAWA (Guest), KEITA KOSAKA (Guest)

瀧村依里 (読響首席)、對馬哲男

ERI TAKIMURA (YNSO Principal), TETSUO TSUSHIMA

遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)、高木慶太

MARI ENDO (YNSO Solo Cello), KEITA TAKAGI

倉田 優 (読響首席)、片爪大輔

YU KURATA (YNSO Principal), DAISUKE KATAZUME

金子 平 (読響首席)、芳賀史徳

TAIRA KANEKO (YNSO Principal), FUMINORI HAGA

西久保友広、野本洋介

TOMOHIRO NISHIKUBO, YOSUKE NOMOTO

有馬純寿 (ゲスト)

SUMIHISA ARIMA (Guest)

鈴木美潮 (読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員)

MISHIO SUZUKI

クラッピング・ミュージック [約5分]

Clapping Music

ダブル・セクステット [約23分]

Double Sextet

I. Fast II. Slow III. Fast

世の終わりのための四重奏曲 [約50分]

Quatuor pour la Fin du Temps

I. 水晶の礼拝

II. 世の終わりを告げる天使のためのヴォカリーズ

III. 鳥たちの深淵

IV. 間奏曲

V. イエズスの永遠性への頌歌

VI. 七つのラッパのための狂乱の踊り

VII. 世の終わりを告げる天使のための虹の錯乱

VIII. イエズスの不滅性への頌歌

ピアノ
Piano

ヴァイオリン
Violin

チェロ
Cello

フルート
Flute

クラリネット
Clarinet

打楽器
Percussion

音響
Sound

ナビゲーター
Navigator

ライヒ
REICH

ライヒ
REICH

[休憩]
[Intermission]

メシアン
MESSIAEN

MESSIAEN

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)



独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：横浜みなとみらいホール



文化庁委託事業「2019年度 戦略的芸術文化創造推進事業」

主催：文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

11/23 Sat.
holiday

第222回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.222 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

11/24 Sun.

第222回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.222 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

モーツァルト
MOZART

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

プーランク
POULENC

ヤナーチェク
JANÁČEK

トマーシュ・ネトピル -p.7

TOMÁŠ NETOPIIL

アレクサンドル・タロー -p.8

ALEXANDRE THARAUD

長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲 [約7分] -p.12

“Don Giovanni” Overture

交響曲 第38番 二長調 K. 504 〈プラハ〉

[約26分] -p.13

Symphony No. 38 in D major, K. 504 “Prague”

I. Adagio - Allegro
II. Andante
III. Presto

ピアノ協奏曲 [約20分] -p.14

Piano Concerto

I. Allegretto
II. Andante con moto
III. Rondo à la française : Presto giocoso

シンフォニエッタ [約24分] -p.15

Sinfonietta

I. Allegretto
II. Andante
III. Moderato
IV. Allegretto
V. Andante con moto – Allegretto

11/29 Fri.

第593回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.593 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Guest Concertmaster

モーツァルト
MOZART

リゲティ
LIGETI

リゲティ
LIGETI

[休憩]
[Intermission]

スーク
SUK

トマーシュ・ネトピル -p.7

TOMÁŠ NETOPIIL

ジャン＝ギアン・ケラス -p.9

JEAN-GUIHEN QUEYRAS

白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲 [約5分] -p.17

“La clemenza di Tito” Overture

無伴奏チェロ・ソナタ [約8分] -p.18

Sonata for Solo Cello

I. Dialogo
II. Capriccio

チェロ協奏曲 [約15分] -p.19

Cello Concerto

I. Quarter note = 40
II. Quarter note = 40

アスラエル交響曲 ハ短調 作品27 [約58分] -p.20

Asrael Symphony in C minor, op. 27

I. Andante sostenuto
II. Andante
III. Vivace
IV. Adagio
V. Adagio e maestoso

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック

指揮

小林研一郎
(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

炎のコバケンが聴かせる 哀愁のスラヴ魂



©読響

読響と厚い信頼で結ばれた“炎のマエストロ”が登場。渾身のタクトで聴衆を魅了し続ける名匠が、今回はドヴォルザークの二つの人気作品に熱い魂を込める。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科の両科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「ブラハの春音楽祭」オープニング・コンサートの指揮者に東洋人として初めて起用され、〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏して絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”、ハンガリー文化大使の称号を授与された。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督等を務めている。

録音では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博している。

指揮

トマーシュ・ネトピル

TOMÁŠ NETOPIIL, Conductor

チェコ期待の俊英 注目の初登場



©Elisa Haberler

シンフォニーとオペラの双方で国際的に活躍し、充実した音楽づくりで注目を浴びるチェコの俊英が読響に初登場。ヤナーチェク、スークなど得意のお国ものを取り上げ、思い切りのいいタクトでオーケストラを巧みにドライブする。

ストックホルム王立音楽院でヨルマ・パヌラに指揮を学び、2002年の第1回シヨルティ国際指揮コンクールに優勝して話題を呼んだ。プラハ国民劇場、エステート劇場の音楽監督などを歴任し、現在はドイツの名門エッセン歌劇場とエッセン・フィルの音楽総監督、チェコ・フィルの首席客演指揮者を務めている。これまでに、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ウィーン響、ドレスデン国立歌劇場管、パリ管、フランス国立管、ロンドン・フィル、フィルハーモニア管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、チューリヒ・トーンハレ管などに客演。オペラではウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、バイエルン国立歌劇場、パリ国立オペラ、チューリヒ歌劇場、ザルツブルク音楽祭などで活躍しており、来年2月には、ウィーン国立歌劇場で〈フィデリオ〉（新演出）を指揮する。

ヤナーチェク、マルティヌーなどを得意とするほか、モーツァルト、ワーグナー、R.シュトラウスなどでも高い評価を得ている。録音も数多く、エッセン・フィルとの『スーク：アスラエル交響曲』は「曲を十分に理解し、ドラマティックでありながら、細部にいたるまで印象的だ」（「BBCミュージック・マガジン」誌）と絶賛された。

11/17
みなとみらい

Artist



©Charlotte Fielding

チェロ

伊藤悠貴

YUKI ITO, Cello

欧州で活躍する新時代の気鋭のチェリスト。1989年生まれ。15歳で渡英し、英国王立音楽大学を首席で卒業。ブラームス国際コンクール、ウィンザー祝祭国際弦楽コンクール優勝。これまでに小澤征爾、V. アッシュケナージ、D. ゲリングスらと共演し、2011年には名門フィルハーモニア管とも共演、18年にはウィグモア・ホールでリサイタルを開催して成功を収めた。幅広いレパートリーの中でも、とりわけラフマニノフおよびイギリス音楽の研究・演奏をライフワークとし、デビューアルバム『ラフマニノフ：チェロ作品全集』は英ストラッド誌で特選盤に選ばれ、最新アルバムの『ザ・ロマンティック』は「レコード芸術」誌の特選盤に選ばれた。19年齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。使用楽器は日本ヴァイオリンから貸与された1734年製ゴフリラー。読響初登場。



©François Séchet

チェロ

ジャン＝ギアン・ケラス

JEAN-GUIHEN QUEYRAS, Cello

現代作品も数多く手掛け、幅広いレパートリーで意欲的な活動を続ける世界的チェリスト。1967年モントリオール生まれ。ウィーン楽友協会、ウィグモア・ホール、カーネギー・ホールなど欧米各地でリサイタルを開催。また、スラットキン、ネゼ＝セガンらの指揮でパリ管、フィルハーモニア管、スイス・ロマンド管などの一流楽団と共演。2002年からアルカント・カルテットのメンバーとして活躍するなど、室内楽奏者としても活動している。数多くのCDをリリースし、中でも1994年にリリースされたプーレーズ指揮によるリゲティの協奏曲の録音は高く評価され、彼の名を世界に広めた。使用楽器は1696年ジョフレド・カップパ製（メセナ・ミュージカル・ソシエテ・ジェネラルより貸与）。フライブルク音楽大学教授。読響とは2016年にデュティユーのチェロ協奏曲を弾き、絶賛された。

11/29
定期

Artist

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Artist

既存の枠にとらわれない自由な発想によるプログラミングとアプローチで、楽壇に新風を吹き込んでいるフランスを代表する名手。フリーベック・デ・ブルゴス、プレートル、ジンマン、ネゼ＝セガンらの指揮で、ロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、ロンドン・フィル、フランス国立管、リヨン国立管、フランクフルト放送響、チューリヒ・トーンハレ管、フランス放送フィル、ストックホルム放送響などと共演。パリのシャンゼリゼ劇場、ウィーン楽友協会など世界の一流ホールで演奏するほか、エクサン・プロヴァンス、ラ・ロック・ダンテロン、エディンバラ、BBCプロムス、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン、ラインガウなどの国際的な音楽祭にも定期的に招かれている。録音はエラート・レーベルなどから数々のCDをリリースし、いずれも高い評価を得ている。読響初登場。



©Marco Borggreve

ピアノ

アレクサンドル・タロー

ALEXANDRE THARAUD, Piano

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 口短調 作品104

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。すでに国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、1892年9月、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバーの要請を受けて渡米し、同音楽院の院長に就任した。そして、当地で知った黒人霊歌や先住民の音楽の要素を故郷ボヘミアの民俗色が濃厚な作風に融合させ、交響曲〈新世界から〉、弦楽四重奏曲〈アメリカ〉等の傑作を生み出した。しかし、望郷の念が募った彼は、1894年11月から95年2月にかけて、同郷のチェロ奏者ヴィーハンから望まれていたこの協奏曲を作曲し、4月に帰国してしまう。本作は手直しを経て95年6月に完成。翌年ロンドンで初演された。

曲は、哀愁に充ちた雄大かつ情熱的な音楽。渡米翌年の〈新世界から〉に比べると郷愁の度合いはグンと強まり、大規模な構成の中でボヘミア的な情感がたっぷりと歌い上げられる。特徴的なのが、協奏曲には稀なほどシンフォニックな管弦楽。複数の主題をクラリネットが提示するなど、管楽器の活躍も目覚ましい。ソロはすこぶる技巧的ながら、明確なカデンツァはなく、管弦楽との一体感や音楽の流れが重視されている。

なお、第2楽章中間部の訴えかけるような主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだドヴォルザークの歌曲〈ひとりにして〉に拠っており、1895年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にも同旋律が加えられた。

第1楽章 アレグロ 冒頭の第1主題、ホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。朗々と歌いかつ装飾的な独奏が縦横に展開される。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロppo 叙情的な望郷の歌。優しい主部に、激しさを湛えた中間部が挟まれる。

第3楽章 アレグロ・モデラート 民俗色が特に濃い終曲。力強い主要主題に二つの副主題が挟まれ、第1、2楽章の主題も回想される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1894～95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

第8番の完成から4年を経て作曲されたドヴォルザーク最後の交響曲。同ジャンル史上屈指の人気作でもある。1892年9月にニューヨークへ渡ったドヴォルザークは、アメリカの民俗音楽の要素をボヘミア色濃厚な作風に反映させた名作を複数作曲した（チェロ協奏曲の項を参照）。その第1弾が1893年1～5月に書かれた本作。同年カーネギー・ホールで初演され、空前の大成功を収めた。

本作は、故郷ボヘミアの音楽と同じく五音音階を用いた現地音楽への共感、新世界アメリカ——特にエネルギーに充ちたニューヨーク——の印象、母国への郷愁が融合した音楽であり、「新世界“から”発信されたアメリカ便り」といった意味合いをもっている。

曲は名旋律の宝庫。中でも第2楽章のメイン主題は歌詞がつけられ、「家路」の名で普及した。第1楽章序奏部の動機が全楽章に登場する点や、五音音階とシンコーペーションの多用も特徴をなしており、第4楽章にそれまでの三つの楽章の主題が登場するのもドヴォルザークの交響曲では唯一の例。また、第4楽章の一打のみ（しかも弱音）というシンバルの用法も斬新だ。なお第2、3楽章は、アメリカ先住民の英雄を扱った詩『ハイアワサの歌』から靈感を得たといわれている。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト 劇的な開始楽章。遅い序奏の後、序奏の動機に基づいた第1主題、哀感を帯びた第2主題を中心に進行する。

第2楽章 ラルゴ 郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏する美しい主題を軸にした主部に、切なさの漂う中間部が挟まれる。

第3楽章 スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ 舞曲風の楽章。歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 雄渾なフィナーレ。行進曲調の第1主題を中心に運ばれ、優しい第2主題も登場。力強い展開の後、管楽器の和音が弱まる異例の終結を迎える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月15日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Program Notes

モーツァルト 歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉と交響曲第38番〈ブラハ〉は、同じ1787年にボヘミア王国（現在のチェコ東部）の首都であるプラハで初演されたという共通点がある。当時のボヘミアはウィーンを拠点とするオーストリア・ハプスブルク家に支配されており、約300km離れたプラハとウィーンは文化的にも交流があった。

1786年5月1日、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は台本作家のロレンツォ・ダ・ポンテと組んだ歌劇〈フィガロの結婚〉をウィーンのブルク劇場で初演。上演は9回で打ち切られてしまうものの、作品への評価は決して低くなかったようだ。しかし、この歌劇が空前のヒットを記録したのは、プラハの国民劇場における上演時（初演と同じ年の12月以降）である。この熱狂を受け、モーツァルトは妻のコンスタンツェを伴ってプラハを訪問する。

さらに彼はプラハの興行主・劇場支配人であるパスクワレ・ボンディーニという人物から、新作歌劇の委嘱^{いしよく}を受ける。モーツァルトは再び台本作家のダ・ポンテとタッグを組み、スペインの伝説的な人物であるドン・ファン（ドン・ジョヴァンニ）を主役とした物語を構想。女たらしの主人公が、殺してしまった騎士長の亡霊によって地獄へ引きずり込まれるという教訓的な歌劇をわずか^{いしよく}の期間で作曲したモーツァルトは、意気揚々とプラハを再訪し、10月末に初演して再び熱狂的な反響を受けた。「序曲」については、初演直前にわずかひと晩で書き上げたというエピソードも残っており、彼の速筆ぶりを後世に伝えている。

音楽は衝撃的な二短調の和音で幕を開け（ドン・ジョヴァンニを地獄へ引きずり込む騎士長の石像が登場する場面）、後半はこれから上演される歌劇への期待を^{あお}煽る音楽となる。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1787年／初演：1787年10月29日、プラハ（ボヘミア）／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

モーツァルト 交響曲 第38番 二長調 K.504 〈ブラハ〉

歌劇〈フィガロの結婚〉がプラハで成功したことは、ウィーンにおいて思うような評価や人気を得られないと感じていたモーツァルトにとって、大きな自信を与えてくれた。興行主・劇場支配人のボンディーニは〈フィガロの結婚〉の大ヒットを受けて、作曲者のモーツァルトをプラハに招聘。聴衆の熱狂ぶりを伝えると同時に、コンサート等を計画してモーツァルト人気をさらに高めるべく画策したのである。

1787年1月11日、プラハに到着したモーツァルト夫妻は、翌月の8日にその地を離れるまで、さまざまな歓迎を受ける。〈フィガロの結婚〉の上演にも立ち会って熱狂する聴衆に応え、1月22日の上演に際しては自らが指揮を買って出ている。そして1月19日には国民劇場でコンサートが開催され、そこで初演されたのが新作の二長調交響曲（第38番〈ブラハ〉）というわけだ。ただし、モーツァルトはこの交響曲を前年（1786年）の12月初旬には完成させており、ウィーンでの演奏会用に作曲したという説も根強い。それゆえニックネームも、単に「プラハで初演された」という事実から付けられたと考えられる。

第1楽章 アダージョ〜アレグロ、二長調、序奏とソナタ形式の主部。堂々たる響きで幕を開ける序奏から、躍動的なシンコペーション・リズムが印象的な主部へと続く。

第2楽章 アンダンテ、ト長調、変則的なソナタ形式。冒頭の主題を軸としながら、流れるように音楽が展開していく。2年後（1788年）に書かれた交響曲第40番・第41番などへとつながる、構成的に充実した緩徐^{かんじょ}楽章のひとつ。

第3楽章 プレスト、二長調、ソナタ形式。軽快な第1主題は、歌劇〈フィガロの結婚〉第2幕で歌われる二重唱「早くあけて」と同じモチーフ。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1786年／初演：1787年1月19日、プラハ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Program Notes

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Program Notes

プーランク ピアノ協奏曲

20世紀前半のパリ楽壇では多種多様な才能が開花した。フランシス・プーランク（1899～1963）は間違いなくその一人であり、「お茶目で粋なパリジャン」「真摯なカトリック信者」という二つの側面を巧みに音楽へと反映させて多くの作品を世に送り出している。

プーランクはパリ国立音楽院などアカデミックな場での教育は受けておらず、作曲は先輩諸氏の音楽を頼りにほぼ独学で修得したが、ピアノは幼少期に母親から手ほどきを受けた。そこで彼を魅了し、生涯にわたって憧れを抱き続けていたのがモーツァルトの音楽である。ボストン交響楽団からの委嘱により1949年に書かれたピアノ協奏曲は、実にプーランクらしいウィットにあふれた作品だが、その根底にあるのはモーツァルトによるピアノ協奏曲への深い愛情だと考えて間違いない。さらにプーランク自身も優れたピアニストであり（自作やエリック・サティのピアノ曲など多くの録音が残されている）、この協奏曲も自らがソリストとして初演しているため（共演はシャルル・ミュンシュ指揮、ボストン交響楽団）、私たちは曲を通して彼のピアノの腕前を想像することもできるのだ。

第1楽章 アレグレット、嬰ハ短調、自由な形式。独奏ピアノによる冒頭の主題で、聴き手はプーランクの世界へ。次々と場面が変わるように新しい主題が登場する。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート、変ホ長調、三部形式。前半では慈愛の雰囲気漂わせつつ、後半になると劇的な展開へ。

第3楽章 ロンド・ア・ラ・フランセーズ：プレスト・ジョコーソ、嬰ヘ短調、自由なロンド形式。ディヴェルティメント風の音楽が展開される中、フランスの古い海の歌やフォスター作の歌曲〈故郷の人々〉の断片などが顔を出す。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1949年／初演：1950年1月6日、ボストン／演奏時間：約20分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ヤナーチェク シンフォニエッタ

プラハで初演された2曲のモーツァルト作品、そのモーツァルトに憧れ続けていたプーランクの作品と続き、再びプラハで初演されたレオシュ・ヤナーチェク（1854～1928）の作品をもってくるという本日のプログラムは、なかなか興味深い関係性を築いている。代表作のひとつである〈シンフォニエッタ〉は、冒頭とフィナーレで力強く響きわたるファンファーレで人気を集め、さらには2009～10年に刊行された村上春樹作の長編小説『1Q84』において、物語を静かに動かしていくシンボリックな音楽として紹介されると、さらに広く注目を浴びた。

ヤナーチェクはモラヴィア地方（当時はオーストリア帝国傘下、現在のチェコ東部）のフクヴァルディという街で生まれ、モラヴィア民謡などを収集したパーヴェル・クシシュコフスキーという作曲家に師事。師と同様にモラヴィアの民謡や民俗舞曲などをベースとして作風を確立し、後にはボヘミアのドヴォルザークらと並んでチェコの国民楽派／民族楽派にカテゴライズされる作曲家となった。

彼にとっては最晩年となる1926年3月頃、短期間で一気に書き上げられた〈シンフォニエッタ〉は、ヤナーチェクが野外における吹奏楽（軍楽隊）の演奏に感銘を受けたことからスタートしている。その印象をもとに新作の管弦楽曲について構想を練っていたところ、ソコル体育協会から体育祭のために新作のファンファーレを書いてほしいという依頼が舞い込んできた。当初ヤナーチェクは「勝利へと進む人々の美と歓喜、そして勇気」といった精神的かつ愛国的なものを音楽に投影させることを考えていたようだ。作曲の過程においては「軍楽シンフォニエッタ」という題名も考えられ、チェコの国民軍に献呈しようという構想もあったようである。結局のところはコンサート用の管弦楽曲として完成させた後、1926年6月26日にのちにチェコを代表する名匠となったヴァーツラフ・ターリヒが指揮をして初演された。

なお、当初は各楽章に描写的な副題が付けられており、ここでは参考までに各楽章の速度指定表記後へ（ ）で付記しておく。

第1楽章 アレグレット（ファンファーレ）。トランペット、バストランペット、テナーチューバから成るバンド（オプションの別働金管グループ）とティンパニによる壮大なファンファーレ。

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Program Notes

11/23
土曜マチネー

11/24
日曜マチネー

Program Notes

第2楽章 アンダンテ（城[ブルノのシュピルベルク城]）。不気味な反復モチーフ（オスティナート）を軸とした、何かに追い立てられるような音楽。シュピルベルク城は、かつて誰もが怖れたという刑務所として使われた場所。

第3楽章 モデラート（ブルノ王妃の僧院）。穏やかな弦楽の調べで幕を開け、中ほどではトロンボーンがやや雄々しい音楽を奏でて活気を生み出していく。ちなみにこの僧院（修道院）は、少年時代のヤナーチェクが聖歌隊に属して歌っていたというゆかりの場所。

第4楽章 アレグレット（街頭[古城へと至る道]）。トランペットによるファンファーレ風のモチーフが繰り返され、そのリズムが楽章全体を支配する。

第5楽章 アンダンテ・コン・モート～アレグレット（市役所[ブルノの旧市庁舎]）。民謡調の主題で曲が始まるが、徐々に音楽は熱気を帯びていき、第1楽章冒頭のファンファーレを再び吹奏。壮大な音楽となって全曲のフィナーレを迎える。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1926年／初演：1926年6月26日、プラハ／演奏時間：約24分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、サスペンデッド・シンバル、鐘、グロッケンシュピール）、ハープ、バンダ（トランペット9、バストランペット2、テナーチューバ2）、弦五部

モーツァルト

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉は、皇帝レオポルト2世のボヘミア王即位（1791年）の戴冠式^{たいかん}で上演するために、〈魔笛〉の作曲を中断して、わずか数週間で書き上げられた。戴冠式でのオペラ上演全般を取り仕切ったのは、興行師のグアルダゾーニで、彼はまずサリエリに作曲を依頼したが、多忙を理由に断られ、モーツァルトにその仕事が回ってきた。すでに戴冠式まで2か月を切っていたが、モーツァルトは7月末から集中して作曲に取りかかり、プラハに向かう8月26日頃までには大半の曲を完成させた。

マッツォーラによる台本は、もともとは60年以上前にウィーンの宮廷詩人メタスタージオが書いた台本を改作したもので、原作の第2幕をほとんど削除して、3幕から2幕に縮小し、レチタティーヴォを削り、アリアとアンサンブルを入れ替える等、大幅に手を入れた。全体は、コンパクトにまとまったものの、物語の展開に不自然な部分が生じるなど問題はあったが、「皇帝はどのような行いも許してくれる寛大な存在」という内容は伝わることから、上演日も迫っていたのでそのまま作曲を進めることにした。モーツァルトは、プラハ到着後も作曲を続けなければならず、弟子の手を借りながらどうにか戴冠式に間に合わせた。

1791年9月6日、歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉は、プラハの国立劇場でモーツァルトの指揮によって初演された。前述のような状況で作曲されたため、初演は不評に終わり、その後のウィーンでの上演の評判も芳しくなかった。台本の脆弱さゆえに、オペラとして成功を収めることはできなかったが、数々のアリアや重唱、そして八長調の主和音で堂々と始まる序曲（アレグロ）は、モーツァルトらしいあふれるばかりの輝きに満ちている。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1791年／初演：1791年9月6日、プラハ／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

11/29
定期

Program Notes

リゲティ
無伴奏チェロ・ソナタ

20世紀を代表する作曲家ジェルジ・リゲティ（1923～2006）は、国境線が引き直されてルーマニアとなった街で、ハンガリー語を母語とするユダヤ人の家庭に生まれた。戦時中は、ハンガリー軍の強制労働部隊に配属され、九死に一生を得たものの、家族は強制収容所の犠牲になった。大戦後、ブダペスト音楽院で作曲を学び、創作活動を開始するが、社会主義体制下では西側の不協和な響きを含む前衛音楽を聴くことも、自由な創作も許されない。芸術への弾圧に恐怖を覚えたリゲティは、1956年のハンガリー動乱を機に、オーストリアに亡命した。そして、ケルンの西ドイツ放送局の電子音楽スタジオで音響実験や創作を行い、1961年に発表した管弦楽曲〈アトモスフェール〉（後年、映画『2001年宇宙の旅』で使用される）で国際的な評価を確立した。

無伴奏チェロ・ソナタは、ハンガリー時代の作品で、作曲年が異なる2楽章から成る。**第1楽章「ディアーロゴ（対話）」**（アダージョ、ルバート、カンタービレ）は、バルトークやコダーイの影響の濃い学生時代、1948年に書かれた。チェロ科の女子学生にほのかな恋心を抱いていたリゲティは、楽譜に思いを込め彼女に手渡したが、演奏されることはなかった。重音のピッツィカート・グリッサンドで始まる16小節の楽曲で、拍子記号は持たず、民謡風の旋律がしみじみと歌われる。

1953年にハンガリーの著名なチェリスト、ヴェラ・デネシュ（1915～70）と知り合ったリゲティは、新たに**第2楽章「カブリッチョ」**（プレスト・コン・スランチョ）を書き足して、チェロ・ソナタとして完成させた。バガニーニの〈カプリース（奇想曲）〉に倣った技巧的な楽曲で、落ち着いた中間部に第1楽章の重音のピッツィカート・グリッサンドも現れる。デネシュは、このソナタをハンガリー国営放送のために録音したが、「モダンすぎる」という理由で放送許可は下りなかった。30年後の1983年に、リゲティ生誕60年を記念して初演された。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1948・53年／初演：1983年10月24日、パリ／演奏時間：約8分
楽器編成／独奏チェロ

リゲティ
チェロ協奏曲

リゲティの出世作〈アトモスフェール〉（1961）は、電子音楽スタジオで得たアイディアが大編成のオーケストラに投影され、壮大な音響が作り上げられた。リゲティはこの作品で狭い音程の集積から成るトーン・クラスター（音群）を用いた書法を開拓し、さらに1960年代半ばのチェロ協奏曲（1966）や管弦楽曲〈ロンターノ〉（1967）ではクラスターの音響を洗練させ、精緻にコントロールした。

リゲティのチェロ協奏曲は、ベルリンの放送局の委嘱で作曲された。当初は、単一楽章を予定していたが、最終的に連続して演奏される2楽章から成る作品となった。管弦楽は、ハープを含む室内楽的な小編成で、独奏楽器のみが際立つ、いわゆる協奏曲とは異なり、独奏チェロと管弦楽が溶け合い、1枚の織物を織り上げるかのように作られる。1967年4月19日にベルリンで初演され、独奏を務めたドイツのチェリスト、ジークフリート・パルムに献呈された。

第1楽章は、「無から現れるように」と記され、*pppppppp*の記号で指示された独奏チェロのホ音から始まる。管弦楽がそれを補強し、音高の異なる音が重なり、クラスター状態で静的な音響が音色を変化させながら推移していく。最後に独奏チェロが音階的な動きで浮かび上がり、コントラバスの低音を背景にC弦上の第13、14、15倍音を長く響かせ、コントラバスのト音だけがそのまま残る。

第2楽章は、フルートと2本のクラリネットの持続で始まる導入を経て、まず管楽器に細かいトレモロの連続による音響の塊が現れ、続いて弦楽器、その間を悠々と動いていた独奏チェロも揺れ動く。音の動きは細かく複雑になり、10連符、11連符、12連符が垂直に並ぶなど緻密に作り込まれ、管弦楽奏者全員に高度な技巧が要求される。最後は、独奏チェロの「ささやくようなカデンツァ」で、音高不定の急速なパッセージが静かに消えていき、「絶対的な沈黙」で結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1966年／初演：1967年4月19日、ベルリン／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、ハープ、弦五部、独奏チェロ

スーク

アスラエル交響曲 ハ短調 作品27

チェコの作曲家ヨゼフ・スーク（1874～1935）は、ドヴォルザークらが確立したチェコ国民楽派を継承し、初期には民謡を用いたロマン主義風の作品を発表した。やがてそれから脱却し、モダニズムの要素は弟子のマルティヌーに引き継がれ、緻密な筆致と感情豊かな落ち着いた作風で、20世紀チェコ音楽の土台を築き上げた。

スークは、ボヘミアのクルシェチョヴィツェという村に生まれた。11歳でプラハ音楽院に入学してヴァイオリンと音楽理論を学び、1890年に卒業作品を書き上げた。ちょうど翌年からドヴォルザークが音楽院の教授に就任することが決まり、卒業を1年遅らせて彼のクラスで勉強を続けた。1892年に〈劇的序曲〉を書いて学業を終えてからも師弟関係は続き、ドヴォルザークは渡米直前の同年夏に彼をヴィソカー村の別荘に招き、創作の助言をした。そうして完成したのが、スークの代表作〈弦楽セレナーデ〉である。ドヴォルザークの娘オティリエ（1878～1905）と知り合ったのもその夏で、1898年に2人は結婚した。スークは、気鋭の作曲家として早くから成功を収める一方、1892年から1933年までチェコ弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者として活躍し、晩年はプラハ音楽院の作曲科教授も務めた。なお、同姓同名のヴァイオリニスト、ヨゼフ・スーク（1929～2011）は、作曲家の孫にあたる。

1904年5月1日、ドヴォルザークが静かに息を引き取った。スークはすべての氣力を失うほど悲嘆に暮れ、しばらく何も手につかなかった。なんとか作曲途中の交響詩〈プラハ〉を完成させた後、亡くなった恩師に捧げるため新たな作品の構想を練り始めた。〈アスラエル交響曲〉は、1905年2月にスケッチが開始され、4楽章の交響曲として作曲が始められた。ドヴォルザークの〈レクイエム〉（1890）などの引用を含む大作で、第4楽章まで順調に書き進むも、そこにさらなる悲劇が追い打ちをかけた。7月に妻のオティリエが、心臓疾患で27歳の若さで世を去った。耐え難い深い悲しみと絶望に襲われるなか、それを乗り越え、新たな楽章を追加して、全5楽章の交響曲を完成させた。アスラエルとは、死を司る天使の名である。前半の3楽章（第1部）はドヴォルザークの思い出に、後半の2楽章（第2部）は亡き妻に捧げられた。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート 低弦楽器で死の影が暗示され、オーボエが静かに引き継ぐ。増4度の音程を含む「死の動機」が次第に形作られ、ティンパニの強烈なクレッシェンドから弦楽器が「運命の動機」を力強く示す。この動機は、様々な楽器に繰り返され、マーラー風の幸福感に満ちた音楽などをはさみ、劇的に高まる。最後に冒頭の楽想がチェロに現れ、息絶えるように終わる。

第2楽章 アンダンテ フルートとトランペットの変二音の持続と反復から、ドヴォルザークの〈レクイエム〉の動機が現れる。これが3回繰り返され、弦楽器のピッツィカートが葬送行進曲の歩みを進める。最後に再び変二音の持続と〈レクイエム〉の動機が戻ってくる。

第3楽章 ヴィヴァーチェ スケルツォ楽章。快活な主部は、軽やかで管楽器の活躍が目立ち、運命の動機も散りばめられている。中間部（アンダンテ・ソステヌート）は、ヴァイオリン独奏の美しい旋律に導かれ、満ち足りた表情の優美な音楽が広がる。主部が戻り、全楽器による力強いハ短調の主和音で結ばれる。楽譜にはこの後、長い休止をはさむように指示されている。

第4楽章 アダージョ ティンパニの長いトレモロを背景に低音から音楽が立ち上がる。やがて、フルートの愛らしい動機とともに、ヴァイオリン独奏がロマンティックな旋律を奏でる。こうした木管楽器の呼びかけは、ドヴォルザークの作品にも現れる。冒頭部が静かに再現される。

第5楽章 アダージョ・エ・マエストーソ 死の動機で始まるティンパニの強打と金管楽器のコラールの開始で苛酷な現実が突きつけられる。運命の動機が現れ、速度と表情を目まぐるしく変化させながら突き進み、次第に平穏を取り戻す。ハーブのアルペジオを合図に運命の動機が長調で反復され、かすかな光明を見出したかのように至福感をもってハ長調の主和音にひそやかに終結する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1905～06年／初演：1907年2月3日、プラハ／演奏時間：約58分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル）、ハーブ、弦五部